

令和元年6月24日現在

機関番号：37104

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K15844

研究課題名（和文）女性の妊孕力自己認識と卵巣予備能との乖離の予備調査

研究課題名（英文）Preliminary investigation of the difference between fertility self-recognition and ovarian reserve in women

研究代表者

跡上 富美（ATOGAMI, FUMI）

久留米大学・医学部・准教授

研究者番号：20291578

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、生殖年齢にある20～30歳代の女性の妊孕力に対する自己認識と卵巣予備能との乖離の実態を解明する方法を検討することを目的とした。本研究では、20～30歳代前半女性に対して面接を行い、その内容を質的に分析し特徴を明らかにした。その結果、20歳代未婚女性では自己の妊孕力を高く見積もる傾向があるが、主観的な評価にとどまる傾向が見受けられた。30歳代前半の未婚女性においても、自己の妊孕力を80～90%程度と高く見積もる傾向が認められたが、すべての女性においては月経の存在による妊孕力評価をしていたが、35歳という年齢を目前にしており、妊孕力を活かすための健康生活行動をとっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は未婚女性が抱く自らの妊孕力についての認識の特徴を明らかにすることである。本研究では、これから子どもを持ちたいと考えている女性たちが、自らが望むときに子どもがもてるように若い世代の時から自らの妊孕力について考えて行動していくというReproductive Life Planningを今後啓発していくための一次資料になると考えられる。また、今回の結果により、日本人未婚女性においては年代を問わず月経があるという「主観的指標」のみで自らの妊孕力を評価している実態が明らかになり、今後の啓発活動が急務であることが改めて指摘された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine how to clarify the difference between self-recognition and fertility reserve for fertility in women of 20-30 years of reproductive age. In this study, we interviewed women in their early 20-30's and analyzed their contents qualitatively to clarify their characteristics.

As a result, women in their twenties tended to highly estimate their fertility, but tended to remain subjective. Even unmarried women in their early thirties tended to estimate their fertility as high as about 80 to 90%, but all women were also evaluating fertility due to the presence of menstruation. At the age of 35, he was taking a healthy lifestyle to take advantage of his fertility.

研究分野：Womens Health

キーワード：妊孕力 未婚女性 生殖年齢

1. 研究開始当初の背景

将来の日本を担うに当たり、現在最大の問題が少子高齢社会である。日本における合計特殊出生率(2013)は1.43であるが、第14回出生動向調査(2010)によれば20歳代の未婚女性が希望する子どもの人数は2人以上であり、仕事もちながら子どもを産み育てていくことをライフプランとして描いている。しかし、初婚年齢、第1子出産年齢ともに上昇しており、現状は理想する将来像との乖離がみられる。出産年齢の上昇は、卵巣予備能の低下をももたらし、子どもを持ちたいという女性たちの理想と現実の乖離をますます増大させる。加えて、生殖年齢にある女性たち自身は、結婚後に不妊という問題に直面することが多い。女性の妊孕力の低下は30歳から徐々に始まり、35歳を過ぎると加速するといわれ(Menken, 1986)、不妊治療の現場でも卵巣予備能の低下が治療上での課題となっている(藤本, 2012)。一方で、独身女性の多くは不妊に関する正確な知識に乏しく、不妊に関する未婚女性の関心の低さが以前より明らかとなっているが、その背景には自らの妊娠する能力に対する関心の薄さがあると考えられる。実際に40歳以上で不妊治療により第1子を得た女性を対象とした研究では、自分の妊孕力について不妊治療を開始するまで疑いを持っていなかったとの結果が出ている(MacDougall, 2013)。このように生殖年齢にある女性たちの自らの身体、特に生殖器やその機能に対する関心は極めて低い現状にあり、現在・将来にわたっての自己の卵巣機能や妊孕力に対する認識が低いと考えられる。このように生殖年齢にある女性たちの卵巣機能に対する認識と自身の妊孕力に対する認識の乖離に対する気づきが遅れることは、女性の生産力・労働力としての存在が重要視されている日本において、現在の状況は非常に憂慮されるべきものであり、早急に20~30歳代の女性たちに自らの卵巣予備能に対する認識を自覚し、人生設計の一つの指標として自らがその結果を役立てるようにしていく介入が急務である。

2. 研究の目的

少子社会の現在でも、女性の卵巣予備能に対する意識は非常に希薄であり、子どもを望むための不妊治療の過程で自らの身体問題が発覚することで、早期治療開始への後悔をすることも多い。本研究の目的は、20~30歳代という生殖年齢にある女性の妊孕力に対する自己認識と女性たちの卵巣予備能との乖離の実態を解明する方法を検討することである。

3. 研究の方法

「女性の妊孕力に対する自己認識」の構造の解析について

女性が持っている自己の妊孕力を明らかにするため、20歳代から30歳代の未婚女性に対して半構造化面接を用いてデータを収集した。また、20歳代、30歳代という世代による認識の差を確認するため、各世代20名程度の対象者をリクルートすることとした。

半構造化面接に用いたインタビューガイドは先行研究や母性看護学領域研究者との討議を経て作成し、データ収集に用いた。インタビューデータは録音により収集し、面接後逐語録を作成した。分析は、グラウデットセオリーアプローチの手法に沿い、データ収集ごとに継続比較を行った。分析過程においては、研究協力者との合わせ、適宜専門家の助言を得て実施し、分析の真実性の担保に努めた。

また、上記の調査結果をもとに、妊孕力の自己認識質問紙の作成を行った上、妊孕力の客観的指標といわれている抗ミュラー管ホルモン(AMH)の実測を行い、妊孕力に関する自己認識と客観的な妊孕力との乖離状態を明らかにする。

本研究は東北大学大学院医学系研究科倫理委員会の承認を経て実施した(承認番号2015-1-43)。

4. 研究成果

(1) 20~30歳代女性の持つ妊孕力自己認識

本研究の研究参加者は、20歳代未婚女性8名、30歳代未婚女性4名であった。研究参加者の初経年齢は10~14歳であった。20歳代女性たちの平均年齢は21.7歳であり、すべての女性が将来にわたって自分の子どもを持つことを希望しており、欲しい子どもの数は2~3人と回答していた。また、現時点で自分の希望がかなう確率としては、8名中1名のみが50%以下であると回答していたが、5名は80~100%であると回答しており、残りの2名も70%程度と回答しており、自らの妊孕力に対して高い評価をしていることが明らかとなった。また、8名中7名は「30歳までには第1子を出産したい。」と考えていた。

20歳代女性に対するインタビューの結果を質的に分析した結果その特徴として【子どもができないなんて私には当てはまらない】というコアカテゴリが抽出された。このコアカテゴリは<生理は大丈夫だから>、<身体に問題はないから>、<年齢が若いほうがいいから>という3つのカテゴリから構成されていた。<生理は大丈夫だから>というカテゴリは、月経の周期性や随伴症状の程度に関係なく、「生理が来ている」という事実のみを妊孕力の根拠としていた。しかし、その月経は必ずしも順調ではなく、月経周期や月経随伴症状にも問題があるものがほとんどであった。<身体に問題はないから>というカテゴリは、現時点で大きな身体的な既往疾患がないことと合わせて、ただ1度うけた婦人科検診で「子宮に問題がない」と言われたことを根拠としており、定期的な観察の必要性などの視点もなく1度の検診の結果のみを自己の

妊孕力の根拠としている実態が明らかとなった。＜年齢が若いほうがいいから＞というカテゴリは、平均年齢 20 歳代前半ということから年齢に裏打ちされた妊孕力評価となっていた。

30 歳代女性の研究参加者 4 名の年齢は 30 から 33 歳であった。すべての参加者は将来にわたって自らの子どもを望んでおり、その数は 1～2 名でとなっていた。その目標の達成可能性については 20 歳代女性と同様に 80～90%という高い評価を行っていた。

妊孕力の評価の根拠としては、30 歳代女性においても、20 歳代女性と同様に＜生理がある＞ことを、自らの妊孕力の根拠として挙げていた。しかし、30 歳では＜健康的な生活をしている＞と健康的な生活を送っているから妊娠は可能であると自らの健康生活行動を妊孕力の根拠として挙げており、20 歳代の年齢のみを根拠とした「若さ」ではない妊孕力の根拠を示していた。一方で、30 歳代女性においては＜35 歳前だから何度か大丈夫＞というカテゴリが抽出され、妊孕力に対する意識を持っていることも明らかとなった。30 歳代女性研究参加者では、「35 歳が近づいているので早くしないと妊娠しにくくなる」と 4 名すべての女性が述べており、35 歳が妊孕力低下の年齢として意識していた。全員が定期的な婦人科検診を受けており、35 歳という年齢を境に急激な妊孕性の低下が自分にも訪れると研究参加者たちは考えており、そのためにも 35 歳までに結婚・妊娠・出産ができるようにと職業や生活環境を整えるなどを行っていることも明らかになった。この背景には、卵巣機能の低下という知識を有しているばかりではなく、自己の将来の家庭像をもとにした女性の妊孕計画が影響していると考えられ、妊孕性に関する知識的な理解を有していることが明らかになったが、年齢以外にも、自己の妊孕力に客観的敵指標を加えることで、自己の目標を達成することが可能になることが予測された。

(2) 妊孕力自己評価質問紙の開発と AMH を使った卵巣予備能の実態調査

(1) の妊孕力自己評価について質的研究から得られてデータをもとに、質問項目の抽出を行った。それにより、62 個の項目が抽出されたが、本研究においては質問紙の開発までは至らず、卵巣予備能としての AMH の実態と比較することはできなかった。

<引用文献>

- 藤本晃久、卵巣予備能低下 (AMH 低値・FSH 高値) 産婦人科の実際、61、2012、1111-1115.
Mac Dougall K., Beyene Y., Nachtigall R.D., Age shock misperceptions of the impact of age on fertility before and after IVH in women who conceived after age 40. Human Reproduction, 28, 2013, 350-356.
Menken J., Trussell J., Larsen U Age and infertility. Science, 234, 1986, 413.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

須原涼子、跡上富美、アンガホッフア司寿子、川尻舞衣子、武石陽子、中村康香、吉沢豊予子、20 歳代未婚女性がとらえる自らの妊孕力自己認識、母性衛生, 査読有、59 巻、2 号、2018、544-549

〔学会発表〕(計 3 件)

Shizuko Angerhofer, Fumi Atogami, Yasuka Nakamura, Toyoko Yoshizawa, Reproductive Health Awareness among Employed Married Women Who Wish to have Children: Focusing on Women in their 30s. The 21th EAFONS. Korea, 2018.

Fumi ATOGAMI 他 4 名, What is the reason to think that Japanese single women can become pregnant? ICN2017, 2017.

須原涼子、跡上富美、中村康香、吉沢豊予子、20 歳代未婚女性がとらえる自己の妊孕力の内容、第 57 回日本母性衛生学会学術集会、2016.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.womens.med.tohoku.ac.jp/research/fertility/index.html>

6. 研究組織

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：須原 涼子

ローマ字氏名：(SUHARA, ryoko)

研究協力者氏名：武石 陽子

ローマ字氏名：(Takeishi, yoko)

研究協力者氏名：アンガホッフア司寿子

ローマ字氏名：(Angerhofer, shizuko)

研究協力者氏名：川尻 舞衣子

ローマ字氏名：(Kawajiri maiko)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。